

拝啓 瀬戸内寂聴様 二

清重 康代

先生とお別れしてから二年近くが過ぎようとしています。

ご高齢でしたしお別れは必ずくるとわかっていたのに、まだ先生が京都で毎日元気に小説を書いておられるような気がします。コロナ禍だったこともあり最晩年にお会いする機会がほとんどなかったことも先生の死を実感しにくい理由のようです。ただ生誕一〇〇年の日（二〇二二年五月一日）に徳島市国府町井戸寺の納骨堂に納められた片手に乗るほどの小さな骨壺を見た時に、「ああ、先生はもういらっしやらないのだなあ」とほんの少し実感しました。

私が作家瀬戸内晴美先生のことを知ったのは六〇年以上前のことでした。実家の父が先生のお姉さんと短歌を通じ

て知り合いだったのです。歌会前に相談があるとお姉さんは時々我が家へ来ておられました。「瀬戸内のおばちゃん」と幼児だった私は呼んでいました。必ず絵本をお土産にくださるおばちゃんでした。いつもにこやかなおばちゃんでした。ご主人と二人で来られることが多かったように記憶しています。そんな関係からか実家の父の書棚には先生の初期の本がたくさんありました。中高生になった私はその本をほぼ全部読んでいました。両親が「ちよつと早いかなあ、読むには」と思案顔だったのを覚えています。

昨年一二月に井上荒野原作の「あちらにいる鬼」を見ました。その映画の中で井上光晴氏の妻が自転車の後ろにワンピースを着て横乗りしているシーンがありました。あの

シーンを見た瞬間に「どこかで同じ光景を見た。いつだっただろう？誰だったのだろう？」と私は記憶を辿りました。思い出したのは先生のお姉さんがご主人の自転車荷台に和服姿で横乗りして我が家へ到着した光景でした。庭先でストンと飛び降り着物の裾を整えて涼しい顔の瀬戸内のおばちゃんでした。今はほとんど見ない大人二人の自転車の横乗りでした。

お姉さんは一九八一年に寂聴塾が始まった時からずっと先生と塾生の私たちを見守るように一番後ろの席でにやかに座っておられました。私たちが座禅を組むために寂聴塾の会場から近くの瑞巖寺へ移動する時も後ろから優しい笑顔でついてきてくれました。いつでもどこでも徳島にいる時は先生の傍にはお姉さんがいる、本当に仲の良いお二人でした。

そんなお姉さんが御病気になり、どんどん病状が進み亡くなられたのは寂聴塾が始まって三年とちょっとの頃でした。先生は超過密なスケジュールの中、寸暇を惜しんで徳島へ帰り病床のお姉さんを見舞っておられたこと、普段は穏やかで柔和なお姉さんが「帰らんとって」と子どものように先生に縋り付いて泣きじゃくっていたことも後に先生

からお聞きしました。

お通夜の日、小雪の舞う中私は実家の父と二人で紅葉山のお姉さんのお住まいに伺いました。先生は痩せてやつれた様子でお姉さんの棺の横に座っておられました。通夜見舞いの一人一人に挨拶をする先生の背中がいつもより小さく見えました。私は父の横で先生の目をじっと見ているだけでした。誰よりも大切なお姉さんを失ってしまった先生に何とお悔やみを伝えたらよいのか言葉に詰まってしまいました。

先生とお姉さんは今天国でまた四〇年前のようにいつもいっしょにおられるのだと思っています。離れていた年月のいろいろな出来事をユーモアいっぱい語っておられる先生の声が聞こえてきそうです。

先生の笑顔や仕草、語り口調は今もはっきりと覚えています。新聞広告の紙面や本屋の店頭に平積みになっている先生の本が目に入ったら私の背筋はいつも少し伸びます。そして「先生、ごめんなさい。最近だから暮らしています。先生に教わった『切に生きる』ことができてないです、私」と先生に心の中で謝ります。来年はもう少し良い報告ができますように。